

底魚資源調査（夏季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚類の資源動向を把握するため、平成15年から調査船いばらき丸(218t)により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により本県海域の現存量を推定しています。今回は令和7年7～9月に実施した夏季調査結果についてお知らせします。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

平成27年度から今年度までの現存量の推定結果を表1に示しました。また、参考として、県で資源評価を行っている魚種については資源水準も記しました。直近5年間の推定現存量の推移を元に、漁獲対象種の推定現存量の増減傾向（以下、増減傾向という）を判定した結果、増加傾向にあるのはアカムツ1種、横ばい傾向にあるのはヤナギムシガレイ、アオメエソ（めひかり）、ヤナギダコ（水だこ）、ユメカサゴ（のどぐろ）、など6種、減少傾向にあるのはババガレイ（なめた）、マコガレイ（本まこ）、キチジ（あかじ）、マアナゴなど9種でした。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）は減少傾向、テナガダラ（とうじん）は横ばい傾向でした。

表1 推定現存量の推移（夏季トロール調査）

		(単位:トン)												水準※	過去10年 平均
	魚種/年度	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	増減傾向		
漁獲対象種	ヤナギムシガレイ	52	127	71	64	45	27	23	28	48	13	30	横ばい	中位	50
	ババガレイ(なめた)	53	96	79	70	49	25	17	52	77	27	11	減少	中位	56
	アカガレイ(赤がれい)	5	109	29	10	1	2	1	0	1	0	0	減少	－	15
	マコガレイ(本まこ)	16	29	26	19	50	14	18	5	6	0	1	減少	低位	17
	マガレイ(沖まこ)	30	62	77	1	0	1	0	0	0	0	0	減少	低位	17
	ムシガレイ	31	135	155	92	152	115	228	143	245	95	98	減少	中位	128
	ミギガレイ(にくもち)	65	162	111	105	85	36	46	77	53	37	28	減少	－	80
	ヤナギダコ(水だこ)	250	199	217	270	111	68	77	57	244	120	14	横ばい	低位	166
	アオメエソ(めひかり)	48	312	193	260	57	110	160	191	585	463	262	横ばい	高位	222
	チゴダラ(どんこ)	156	387	242	151	157	130	223	80	227	99	131	横ばい	－	184
	マダラ	144	142	16	56	3	4	0	2	15	1	0	横ばい	－	51
	アカムツ	21	22	23	14	24	15	13	13	23	19	20	増加	高位	19
	ユメカサゴ(のどぐろ)	26	32	111	189	78	30	37	70	79	98	41	横ばい	中位	71
	キチジ(あかじ)	34	46	35	8	2	23	9	4	23	2	1	減少	高位	18
種	マアナゴ	34	48	31	35	19	26	20	7	23	4	4	減少	低位	27
	マトウダイ	24	70	34	5	29	17	18	20	33	7	16	減少	－	26
参考	トラザメ(ねこざめ)	1,119	960	1,603	1,231	1,629	1,027	1,077	385	290	197	284	減少	－	1,010
	テナガダラ(とうじん)	6,559	1,126	907	1,113	2,116	340	1,210	1,937	507	157	1,186	横ばい	－	1,720

※「茨城県産重要魚種の生態と資源」(令和7年3月更新、水試ホームページ)で報告している資源水準。一は未評価。

表2 今年度と昨年度の増減傾向の比較

魚種/年度		R6傾向	R7傾向
漁獲対象種	ヤナギムシガレイ	横ばい	横ばい
	ババガレイ(なめた)	横ばい	減少
	アカガレイ(赤がれい)	減少	減少
	マコガレイ(本まこ)	減少	減少
	マガレイ(沖まこ)	横ばい	減少
	ムシガレイ	横ばい	減少
	ミギガレイ(にくもち)	横ばい	減少
	ヤナギダコ(水だこ)	増加	横ばい
	アオメエソ(めひかり)	増加	横ばい
	チゴダラ(どんこ)	横ばい	横ばい
	マダラ	横ばい	横ばい
	アカムツ	増加	増加
	ユメカサゴ(のどぐろ)	増加	横ばい
	キチジ(あかじ)	減少	減少
	マアナゴ	減少	減少
	マトウダイ	横ばい	減少
増加合計		4	1
横ばい合計		8	6
減少合計		4	9

2 今年度と昨年度調査結果の比較

今年度と昨年度（令和6年度）の調査時に行った増減傾向の判定結果の比較を表2に示しました。漁獲対象種の増減傾向を比較した結果、アカムツは昨年度同様に増加傾向でしたが、ヤナギダコ（水だこ）、アオメエソ（めひかり）、ユメカサゴ（のどぐろ）は増加傾向から横ばいになり、ババガレイ（なめた）、マガレイ（沖まこ）、ムシガレイ、ミギガレイ（にくもち）、マトウダイでは横ばいから減少傾向になりました。昨年度は一昨年度に比べて横ばいや減少を示す魚種が多くなりましたが、今年度は更に減少を示す魚種が多くなりました。

これらの増減要因を解明していくため、水産試験場では今後も資源動向のモニタリングを継続していくとともに、資源の持続的な利用に向けて調査研究を進めていきます。

3 アオメエソ（めひかり）の漁獲シミュレーション

アオメエソ（めひかり）は本県底曳網の重要魚種であり、本県では 11 月頃に体長 5 cm 程度の小型魚が加入します。翌年 7 月～翌々年 6 月にかけて 8～12cm ほどに成長した後、9 月に 13cm 前後の大型魚として漁獲されますが、10 月以降は大型魚が突然いなくなり、これは産卵回遊と推定されています（水産の窓 6-No. 13 参照）。水産試験場 TAC システムでめひかりの月別単価を集計したところ、10 月から翌年 9 月にかけて単価が上昇する傾向がみられ（図 1）、めひかりの単価は魚体が大きいほど高いことが明らかになりました。

そこで、単価の安い時期（10～1 月）に小型魚を獲り控え、高い時期（2～5 月）に大型魚を漁獲した場合の水揚高をシミュレーションしました。その結果、10～1 月の漁獲量を 10%削減することで水揚金額は 277～1,521 万円増加、20%削減することで 554～3,019 万円増加、30%削減することで 831～4,656 万円増加すると推定されました（図 2）。今後は、小型魚の漁獲を控える方策の検討など、引き続きめひかり資源の有効活用に向けて調査研究を進めていきます。

（定着性資源部 多賀・外山・水谷・西）

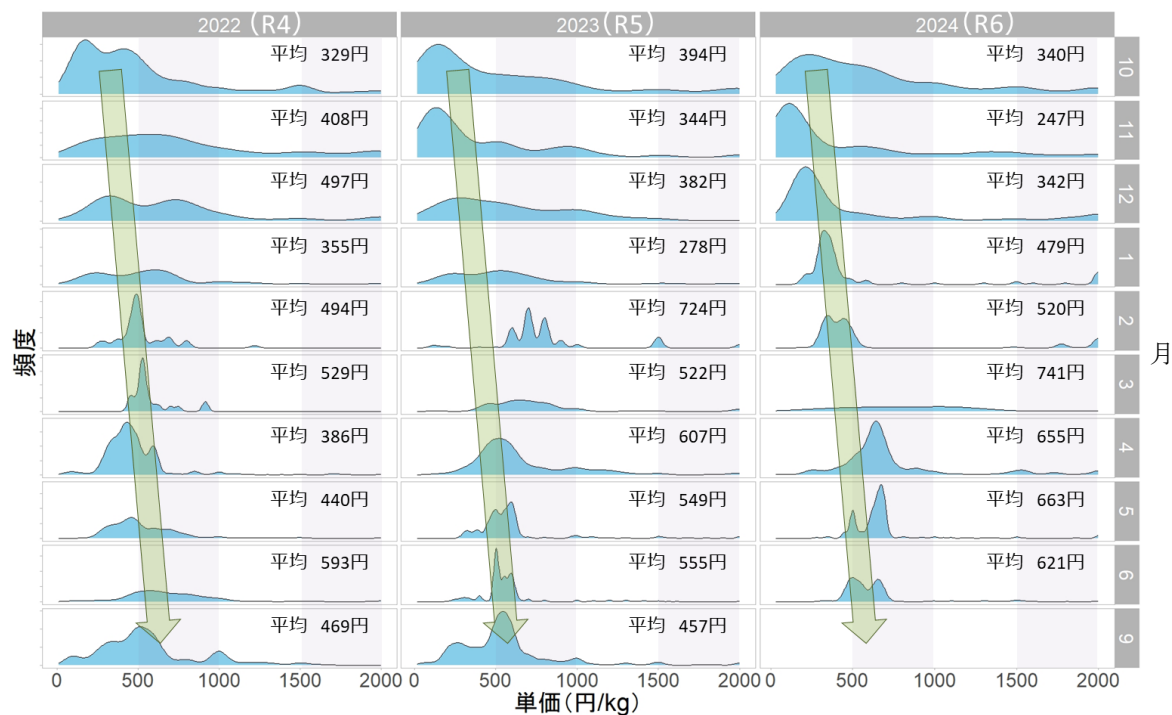


図 1 本県におけるアオメエソの月別単価の推移

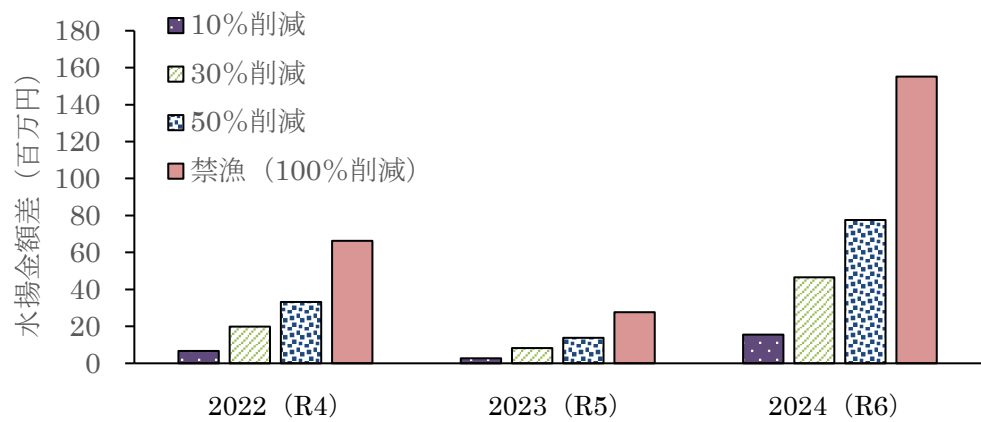


図 2 10～1 月の漁獲尾数を削減し、2～5 月に上乗せした場合の水揚金額差

【次回予告】

令和 7 年 10 月 10 日発行の水産の窓は「令和 7 年 10 月の海況と今後の予測」を予定しています。